

スペシャルオリンピックスでの活動が 知的障害児・者、その家族に与える影響 ～ノーマライゼーション社会の実現に向けて～

江村 拓哉

(コミュニティ福祉学研究科博士課程前期課程)

1. 問題の所在

現在、日本の障害者施策は、国連で採択された障害者権利条約の批准をもとに法整備が行われている。障害者権利条約の理念は、従来の障害そのものが原因で日常生活に制限を受けてきたという考え方から、その障害について理解し、考えようとしてこなかった社会的障壁に問題があるというものである。なかでも障害者基本計画においては「国民だれもが相互に人格と個性を尊重し、支え合う共生社会を理念とし、自己決定の尊重と意思決定の支援やアクセシビリティの向上を明記し、障害者の文化、スポーツ・レクリエーションの振興を行う」としている。

2. 本研究における目的

本研究でスペシャルオリンピックス（以下SO）を題材とした理由は、SO千葉サッカープログラムにおいて4年間認定コーチとして活動した経験があげられる。初めはボールに興味のなかった参加者が、回数を重ねるにつれ積極的にボールに触るようになったり、学年が上がるにつれてリーダーシップをとるようになったりと、成長を感じる場面が多くあった。近隣の高校生や大学生と交流する機会を設けた際には、障害の有無に関わらずボールを追いかけ、ゴールが決まると喜びを分かち合う姿を目にしてきた。私はそうした姿にスポーツの可能性を感じ、サッカーという共通点から相互理解へと結びつくのではないかと考えたためである。

以上より、本研究では、SOに参加している本人及びその家族に着目し、SOに参加するに至った経緯などインタビュー調査に基づき、SOに所属することで参加者とその家族にはどのような影響があるのか、加えてノーマライゼーション社

会の実現に向けて当事者の抱える課題を明らかにしていくことを目的とする。

3. 研究方法

(1) 調査方法と研究協力者の選定

研究目的に照らして、半構造化インタビューに基づく質的研究法を採用した。半構造化インタビューにおいては、調査方法の特性上ラポールの形成が大切であるとされている。そのため研究協力者の選定においては、私がボランティア活動をしているSO千葉・サッカープログラム参加者の中で、家族でプログラムに年間を通じて定期的に参加し、ラポールの形成がなされているとみられる参加者本人およびその家族を対象とした。

調査期間は2016年9月～10月である。インタビューでは①SO以外の活動に参加しようとしたことはあるか。そのとき家族及び本人が気にしていたことは何か。②何を理由に参加を決めたか。躊躇したか。あるいは拒否されたか。③上記の経験から現在にも心理面・行動面に影響を及ぼしていると考えられること。④SOに参加することになった経緯とその理由。⑤SOに参加することの目的、心理面・行動面への影響。⑥障害の種別 手帳の有無及び等級 年齢 性別 家族構成 学歴についての項目を事前に設定し、回答者の話の内容に応じてインタビューを進めた。本研究において分析対象とするのは、知的に障害のある参加者5人およびその家族によるインタビューデータであり、回答者は対象によって異なる。研究協力者の概要は表1に示したとおりである。

(2) 倫理的配慮

研究協力者に対し、研究目的・質問内容について事前に報告を行った。個人情報守秘義務・匿名性については口頭で説明を行い、調査結果の公表と本件のインタビュー調査での内容について不具合があった場合の対応について了承を得ている。また、本調査の実施にあたっては、SO千葉・サッカープログラム運営者に本研究の趣旨を説明し了承を得た後、実施している。

表1 研究協力者一覧

協力者	診断名	等級	年齢	性別	家族構成
Aさん	知的障害	B-II	17	男	A父・A母・Aさん・A弟 ₁ ・A弟 ₂
Bさん	広汎性発達障害	A-I	13	男	B父・B母・B兄・Bさん
Cさん	知的障害・自閉症	B-II	21	男	C父・C母・Cさん・C弟
Dさん	自閉症スペクトラム	B-II	12	男	D父・D母・Dさん
Eさん	知的障害・自閉症	A-I	21	女	E父・E母・Eさん・E妹

(3) 分析方法

インタビュー調査にて得られたデータは要約体にて記録し、分析を行った。a, 調査協力者の要約体それぞれについて、心理面・行動面の影響、意思決定に着目し切片化、コーティングを行った。b, 各調査協力者の要約体を比較検討しながら、初期コーティングによって蓄積されたコードについて、参加者本人が感じている課題と保護者が課題として感じていることを分類しさらにコーティングしていった。なお個人を特定されないように配慮するため、語尾を可能な限り統一する形をとっている。

4. 調査結果

(1) SO以外での競技歴と選択における葛藤

①競技種目における特徴

今回、SO以外の活動に参加しようとしたことはあるか。そのとき家族及び本人が気にしていたことは何か。というインタビュー調査を実施した。その中で保護者が最も危惧していたことは、子供が他の参加者と関係を構築していけるかという点と周囲に迷惑をかけてしまわないかという2点であった。Eさんの父親は、「参加者の中で障害があるのは本人だけだったので、グループ活動の際に本人のいるグループだけが遅くなってしまわないか、周囲に迷惑をかけないか心配だった。」と言う。結果的に数回参加して行かなくなってしまったとのことであった。このように周囲との関係性を危惧している保護者が多いことや障害の特性から集団行動が苦手であることを考慮し、周囲との関係が深くなりやすい団体種目を避け、個人種目を選択している傾向がある。自分の子供たちがうまく馴染めるように、というよりもまずは周囲の人たちにいかに迷惑をかけずに活動していけるかという点に重点を置いているようであった。Bさんの父親は「他害行為と他の参加者との兼ね合いは気にかけていた。今は他害行為をすることは、本当に滅多にないんだけど、昔はあまり好きじゃない人が近くに来た時に叩いたりしちゃってね。だから他の参加者に迷惑がかからないようにすごく気にしていた。」と話してくれ、Bさんの母親も同様のことを危惧していた。

水泳教室に通っていたCさんの父親は「子供を見て、障害の専門家でない人にも障害について理解してくれるようになったのはよかったと思うよ。子供を見て、行動を起こしてくれたこと人たちがいてくれたことが嬉しかったし、触れ合ってきた人たちにとっても何か残ってくれていたら嬉しいよね。」や「世間一般に知的障害について知ってもらいたいよ。身体障害はパラリンピックで注目を浴びているけど、知的はまだまだ知られていないでしょ。」と、自分の子供たちとの関わりの中で、障害について知ってもらいたいという意識が表れているように感じた。知的障害とはどういったもので、どのような特徴があるのかという点を知

る機会は少ない。義務教育の場においても触れ合う機会は限定的であり、集会などで静かにしてられないなどの悪いイメージが先行してしまい、偏見が生まれてしまっている。しかしスポーツ等を通じて障害のある方が社会的ルールを理解し、相手をリスペクトし、努力している姿や喜んでる姿を健常者に知ってもらうことは、障害のある方でも「こうすれば出来る」ということを健常者が「知る」ことへと繋がり、こういった活動を発信し、継続していくことは、差別や偏見などの課題を解消する一つ的手段になり得ると私は考えている。

②居場所選択における特徴

スポーツや余暇活動の選択において、保護者に共通していたのは障害等級に関わらず、障害者が社会的に受け入れられる環境が少ないことを認知しており、障害があっても受け入れてくれる環境を始めから選択していることがわかった。Bさんの母親は、「拒否されないような場を探したり、教えてもらったりしていた。断られる可能性があるところに相談しても無駄だろうというのがあった。」とあり、こうした傾向も障害のある方のスポーツや余暇活動への参加を妨げている要因の一つではないかと感じられた。加えて主催者側に障害があることを伝えると、等級や本人の状況に関係なく拒否をされたという事実が障害のある方のスポーツ活動の妨げとなっているのではないだろうか。Cさんの父親は「障害者は社会的に見たら避けて通りたい絶対的弱者であって、子供がいなければ自分も知らなかったかもしれない。」や「子供が生まれる以前は意識していなかったこともあり、知らなかった当時の自分と同じような考え方が今の世間一般の考え方だと思う。」と話してくれ、こういった意識が選択する際の特徴にも現れていることがわかる。

今回の調査で、競技への専門性よりも障害への理解がある指導者を求めていることが明らかとなった。Dさんの母親は、「外国から帰国して初めは遊びに行く場所もなかったので、体を動かせる場所が欲しかったんですね。だけど最初に参加しようとした所は障害があることを話ただけで拒否されてしまって。私が海外にいた時と同じようなイメージでいたのも悪いんですけど、海外と日本の障害に対する意識の差に愕然としたし、この先どうすればよいのかお先真っ暗という感じ。」といい、「外国では普通の体操クラブに参加していたし、理解ある指導者に巡り合えて、外国では障害があるということを忘れることができるくらい周囲のサポートがよかったのでその分ギャップがすごかったです。」とも話してくれた。国によって障害に対する捉え方も違うであろう。しかし今回の調査から言えることは、日本よりも外国の方が障害に対してオープンで、周囲が何かサポートをしてあげようとしている事実が浮き彫りになったということである。

③居場所作りにおける課題

私は日本における障害者の居場所作りにおいて、集まれる環境と集まれない環

境に二極化してしまっているのではないかという点と今後障害に理解ある指導者をどう育成していくかという点の2つの課題があると私は考えている。この2つの課題は、障害当事者の社会参加を妨げ、満足に生活を送れず、社会参加への意志があるが故に壁に直面し、将来を悲観せざるを得ない状態に陥ってしまっている原因とも捉えられるのではないだろうか。

まず二極化については、保護者間の繋がりが強いこともありこの傾向はますます強まっていくことが予測される。これは地域格差にもなりかねず、障害者が生活しやすい地域と生きづらさを感じやすい地域に二分化する恐れもあり、ノーマライゼーション社会の実現に向けての阻害因子になり得るのでないだろうか。現に障害福祉サービス等も市町村によって格差があり、制度が整っている市町村に移住する人たちがいることから推測できる。

次に活動の場を選択するために地域のスポーツクラブや教室に連絡を取るが、言葉を濁しながらも障害を理由に拒否されたという方もいる。こういった経験にAさんの父親は「次に何かしようとしたときに、同じように拒否されるのではないかと不安になる。常に障害に対してシャッターがあるかのように感じてしまうことがある。」と話してくれた。Eさんの父親の「音楽に合わせて鏡の前で踊ったりしていたので、ダンス教室に参加させるか考えましたが、その教室の参加者は健常者ばかりで、地域的な課題もあったと思うけど理解者がいなかったから参加できなかったんですよ。」という語りが示しているように、子供たちの好きなことを日常生活の中で感じて、体験させてあげたくても、体験させることができないもどかしさや歯がゆさに直面していることが多いのである。障害の理解のある指導者を養成することは、障害のある方の社会参加の可能性を広げる重要な構成要素であると考えられる。

(2) 保護者の心理

①保護者がスポーツや余暇活動をさせる理由

保護者がスポーツや余暇活動をさせる理由として、運動する機会が少ないことから健康のため、交友関係を広げるため、地域として学校や施設以外での居場所のため等家庭によって様々な要因が見受けられた。要因は様々であったが、共通の意識として障害を理由に家庭や学校、施設等に閉じこもることなく何事もチャレンジさせてあげたいという意識があることがわかった。Aさんの父親は「親としては心のどこかに、みんなと同じような習い事等をやることで普通に近づけたいというのが振り返ってみるとあったように感じているんですね。」と話している。

しかしながらこういった保護者の思いがあるにもかかわらず、それらを受け入れる環境が乏しいことは大きな課題として残っている。これは障害について知る

機会が少ないこと、利益につながるような参加率が得られるのか、バリアフリー化に伴う費用や維持費用の問題など課題が山積していることが考えられる。少子化が進み参加者が全体的に減少傾向にある中で、障害者の参加に目を向け、安定した顧客が欲しい運営側とスポーツの場を提供してほしいと考える障害者側のニーズの一致を客観的に証明できれば、障害について知ろうとする意欲や専門職員の配置に繋がるのではないだろうか。また受け入れることが出来る団体と出来ない団体の違いやその理由についても分析し、なぜこのような現状になっているのか把握する必要があると私は考える。

保護者は家庭や施設以外に居心地良くいられる居場所としての役割も期待しており、Aさんの父親の「学校ではいじめの標的になることも多く、同じ学校に通う同級生に引け目があったためなるべく他の学区のクラブを探したりしましたね。」という言葉からも感じることができ、子どもたちが自分らしさを存分に発揮できるような居場所を探している。

②将来への不安

子どもたちの将来の不安は保護者の共通認識として根強い。Aさんの父親は、「高校が特別支援学校のため高卒の資格がなく、最初から就職しか道が無いような環境になってしまい、せっかく本人が水泳や卓球を経験し自信を持つことができてもそれを発揮する場面が無くなって、自信をつけさせてしまったことが悪いことだったんじゃないかと思うこともありますね。周囲の健常者の子供たちと比べると進路選択に自由がなく、障害を抱える人たちは敷かれたレールを歩まなければならないのかって。」と話してくれた。スポーツ活動を通じて、自信を育み、力を発揮しようとしても制度上の壁にぶつかってしまい、個人としての生活を自らの意欲と探求心で切り開くことができなくなってしまっている現状がある。スポーツなどの活動を通じて得られた自信や意欲などがプラスに働くことはあってもマイナスに働くことは無いだろうと考えていた私にとって、衝撃であると同時に、ほかにも同様の悩みを抱えている方々がいるのではないかと感じた。仮に専門学校や大学・短期大学等に進学できたとしても学生生活の質を高めていけるのか、支援体制をどのように整えていくのかなど課題は多いように思える。

Bさんの両親は、「親としては社会性を身につけさせてあげたかった。親は先に死んでしまうし、常に一緒にいられるわけではないんでね。」と保護者が亡くなった後のことを危惧し、生きていく間に少しでも生活しやすいような環境を整え、地域とのつながりを大切にしているように見受けられる。他にもCさんの父親の「親は先にはなくなるし、チャレンジをすることで社会の中に仲間を作ることができたのは、生きる価値に繋がっている。」が示しているように、学校や施設以外の地域に居場所を作ることを求めている保護者は多い。その背景として考えられることは、義務教育就学時に本来であれば地元の小学校や中学校に通い、同級

生や上級生下級生と関わりを持ちながら、地域に住む人たちと繋がりを作っていく。しかしながら障害があり、地域の小学校、中学校で受け入れられる体制が整っていないことや対応に満足できないために地元から少し離れた特別支援学校への進学を選択することがある。そうなった場合、地域に住む人たちとの交流の機会は少なくなり、何かあった際に連絡を取る手段や、頼ったりできるような関係性を築くことは難しいのではないかと私は考える。そのため多くの保護者はなるべく地元で活動できるスポーツや余暇活動の居場所を求めているのではないだろうか。

(3) SOへの参加

SOはその特徴から知的に障害のある方が多く在籍している。47都道府県に支部があり、各都道府県の各地域で様々な種目が実施され、スポーツだけでなく英会話などの文化活動も実施されている。またサービスを提供する人たちは、SOが規定する研修を受けた認定コーチが在籍し、障害に理解がある存在やSOの理念を理解した状態で、参加者を受け入れており、こうした体制が子どもたちを参加させる際の安心感に繋がっている。また練習の成果を発揮する環境も整備されており、地区大会、全国大会、世界大会が夏季・冬季に分けて開催され、参加者の多様な可能性を十分に生かせるような枠組みも一つの魅力である。障害を理由に様々な困難を経験してきた参加者が自らの可能性を広げ、他者から称賛されることで自己肯定感を高め、日常生活における意欲へとつながっていく。

①参加に至った経緯

SOに参加することになった経緯として最も多かったのは知人からの紹介、次に施設職員であり、すべての調査対象者が紹介によって参加するきっかけを得ていた。紹介を受けるまではSOを認知しておらず、SOのような居場所を探し求めているも見つけれない現状があり、広告や認知度を高めるための活動が不足していることがわかった。Aさんの父親は「SOのような団体があるとは思ってもみなかったし、障害が落ち着いたりとかそういうことに対して調べることはあっても、受け入れてくれるようなスポーツ団体を調べることはなかったですね。」と話している。本研究においてはSOについて知っていても参加を躊躇していたという回答はなく、調査対象者のようにSOのような場を求めているも、情報が得られないために参加することができていない人たちは多くいるように感じられた。

また調査対象者からはSOのホームページを閲覧しても、大会の様子が取り上げられているばかりで、日常の様子がわかりにくいとの声もあった。各都道府県にある支部のホームページに開催場所の様子や練習の様子等を写真で公開し、主任コーチや運営者、参加者の声を掲載するなどの工夫が必要になると考えられる。

Bさんの母親は「SOの会場が支援学校の隣にある小学校が会場だったので、場所への認知があったことと、支援学校の知り合いが教えてくれたので安心感があったので躊躇なく参加させてみようと思ったのがきっかけですね。」と話してくれた。障害の特性から初めての場所が苦手な方も多く、写真や動画で活動の様子がわかることは障害のある方たちの安心感につながる。加えてEさんの父親の「通っていた施設の職員が教えてくれた。参加者にも知り合いが多かったし、本人が参加しやすい環境であったのが一番かな。」が示しているように、仲間が近くにいることは、雰囲気や周囲との人間関係を見て学びながら、場に慣れていく過程において重要な存在になり得る。

② SOが持つ独自性

SOの特徴として、認定コーチの資格を取得するために独自の研修が存在することは、大きな特徴と言える。研修内容はSOの理念や設立に至った経緯、誰もが参加できるようなミニゲームの方法や練習方法等多岐にわたる。認定コーチの資格は4年に一度の更新型でスキルアップを目指しており、SOには独自の力強さがある。

SOは全国に支部があり、世界中で行われている団体ということもあり、日本ではまだまだ未熟ではあるが、外国では抜群の知名度がある。Bさんの父親の「子供たちが自分を表現できる数少ない場所だと思うんですよ。」という語りが示しているように、社会の中で、障害のある方がスポーツを用いた自己表現の場が限られてしまっていることがわかる。練習の成果を発揮できる競技会があることは、ただ運動をするだけでなく目的意識を持ち、活動や日常生活においても活気が生まれることが考えられるが、そのような場が欠如しており、SOのような競技会は障害がある人にとって唯一の存在であるという認識であった。発表や競技会において他者から賛辞を受け、自己肯定感を高めるということは非常に重要なことである。

(4) SOという価値

①なくてはならない場所

今回のインタビュー調査において、多くの回答者はSOを唯一子供たちが自分らしさを表現できるかけがえのない場として捉えていた。Aさんの父親は「唯一成功体験ができるところかな。子供と言い争いになったりとか嫌なことがあっても、親としても子供と予定を合わせていきたいと思える場所。家族としてもかなりお世話になったことで他人に対して思いやりや感謝の気持ちを伝えることの大切さを再確認させてくれましたね。」と話してくれた。Dさんの母親は「両親・本人を含めて生きがいであり、非常にやりがいを感じますね。家族にとって必要なイベントで、何か言い知れぬパワーを感じることができて自分まで元気になれ

るそんな場所。参加者全員で支え合っている雰囲気があって、居心地は抜群にいいです。」と話し、Dさんの父親は「自分も一緒に参加できるので、自然とコミュニケーションも生まれるし、体感で子供の成長を感じられることは強みですよ。身体障害と違って知的障害にはなかなかね、光が当たっていないとか注目を浴びることって少ないし。それに自分の息子みたいな子たちはスポーツや習い事をする機会も少ないし、SOのような場所は社会的にも必要な場所だと思うんですよ。」と話してくれた。家族全体が居心地よく集まれることや家族で参加するイベントとしての役割をもち、家族間のコミュニケーションに欠かせないものとなっている。普段は学校や施設等保護者の目から離れてサービスや教育を受けており、様子をはっきりと把握することは難しい。しかしSOでは保護者が送迎を行い、保護者が会場の準備を手伝い、保護者も子供と一緒にプログラムに参加している。そこでは自分の子供だけでなく、他の参加者ともふれあい、一人ひとりの個性を感じることができる。そうした中でわが子を客観視し、成長をより一層実感することができる。これは参加型のプログラムの一つの強みと言えるだろう。

Eさんの父親の「本人が喜んでいることがなによりだけだね。そういえば娘は普段は小さい子に対して声を出したり嫌悪感を示す傾向があるんだけど、SOではそれは見られないのが不思議なんだよね。一緒にやる仲間意識がついてきているのかなって思えるんですよ。」が示すように、一人ひとりを受け入れる全体の雰囲気が安心感を生みだしているのかもしれない。

他にもBさんの母親は「気軽に行ける居場所で、家族としてなくてはならないイベントになっていますね。他では周りの空気が読めず、問題行動として捉えられるような本人の行動が問題視されず、本人を気かけながら笑顔で見守ってくれる人達がいることは本当にありがたい。」と話してくれた。SOでは笑顔で見守られている雰囲気があり、日常生活で張りつめていた心の緊張がほぐれ、保護者にとっても憩いの場になっている。障害のある方を養育する保護者は様々な壁にぶつかり、偏見や制度上の壁、人間関係などに気を配りながら日常生活を送っている可能性は高い。こうしたことが、より一層SOの居心地の良さを際立たせている可能性は否定できない。いかに一般社会の雰囲気とSOの雰囲気が異なるかを示しているようにも感じられる。Bさんの父親は「子供たちが自分を表現できる数少ない場所ですよ。参加者一人ひとりの障害の程度に合わせて指導してくれることもいいことだけど、運動ができる人たちに合わせていくことも必要だと感じているんでね。」と話し、ここでもSOを貴重な居場所として評価している。またSOの特徴の一つでもあるディビジョニング（一人ひとりの障害の程度に合わせてクラス分けを行い、能力に合わせたプログラムの提供を行い、最大限の力を引き出せるようにサポートしていくというもの。日々の練習の様子や定期的開催される記録会のスコアをもとにディビジョニングを行う。）の評価に加え、自

分よりも優れているような人たちと一緒にあってプログラムをこなしていくことも提案している。常に同じレベルの人たちとプログラムをこなしていくのではなく、時々レベルの高い人たちとプログラムをこなしていくことで、自分に不足している能力やレベルの違いを実感することになり、今の自分に満足することなく高みを目指し、成長していく。能力の差を痛感し、悔しいなどの感情を感じさせてくれることもスポーツの持つ大きな力であろう。

②保護者間での情報共有

SOは、障害のある方にとってかけがえのない存在であることは前述したが、それは参加している保護者にとっても同様のことが言える。参加者の障害の程度・年齢・性別は様々で、一人ひとり異なる背景が存在する。生活の中で得られた情報は実体験をもとにしているため正確であり、相互理解のもとに濃密な話し合いをすることができ、日常生活における悩みや葛藤などを気軽に相談できる。Bさんの母親は「行けば必ず本人も親も誰かしらと交流があるじゃないですか。」と話し、Bさんの父親は「他の参加者の家族から様々な情報を聞いて、息子の今後をある程度予測ができるのはいいですよ。安心感がありますから。」とし、Bさんの両親は子供だけでなく、自分たちにとっても情報を得られる居場所として評価している。Dさんの母親は「自分の子供の成長だけでなく、他の参加者の成長をみられるのも嬉しいですよ。」と話し、サッカーをプレーしている姿だけでなく、保護者間でのコミュニケーションから日常生活の様子を話し合い、その成果を称賛しあう場にもなっている。

③参加者本人のSOに参加する目的

参加している本人はSOにやりがいを感じていることが多い。それは継続して参加している割合が高いことから見受けられる。Aさんは「元々サッカーが好きだった。小学校一年生のころから参加していますし、自分の成長を実感していることも続けることができている理由かなって思います。何より皆と一緒にプレーできることが好き。」と話してくれた。家族以外に自分の成長を見守ってくれる大人や一緒に成長できる仲間がいることは参加する意欲となっているようである。Cさんは「皆で応援すること。学年に関係なく楽しめる。年下の面倒を見ることが好きなので。優勝したのはよかった。メダルは今でも飾っている。」と話している。Cさんの父親は「最初は草むしりやぼーっとしていたが、ボールに触れる度に褒められて、おだてられて頻繁に触るようになっていった。」と当時の様子を語ってくれた。コーチやボランティアは新たな参加者が増えた際には相手の特性に合わせ、コミュニケーションを図り、指導方法など臨機応変に対応しており、その重要性を再認識することとなった。他にもDさんについて父親は「自分よりうまい人を見て、自分もそうなりたいと努力している姿が見られる。帰りの車の中で早く上のディビジョンでやりたいって言うようになってね。」と話し

てくれた。コーチとして安全性の確保に加え、一人ひとりがより多くボールに触れられるよう能力に応じたディビジョニングを意識している。意図していることとは別に、参加者は向上心を高め、自己研鑽に励むきっかけとしていることがわかった。

5. 考察

(1) 居場所選択における葛藤とSOがもたらす影響

本研究の分析結果において示されたスポーツの場所選択における保護者が抱えている葛藤については、障害等級や障害種別を問わず、共通していると解釈できるものであった。例えば、「自分の子供が参加することで、他の参加者に迷惑をかけてしまうのではないかという他者への配慮」や、「障害について理解ある指導者が配置されているかという安心の担保」などはその顕著な例である。自分の子供にとって最善の場所であるためには、他の参加者との兼ね合いや障害への理解は何よりも優先されるべき事項であり、障害のある方の保護者であれば多くの方が直面する課題であると言える。

また学齢期においては学校の授業で体を動かす機会は保障されているが、成人した後や義務教育就学後は自ら活動の場を探さなければならない。SOでは参加の際に年齢制限は設けておらず、義務教育就学後であっても継続して参加することができる。参加者や保護者間では積極的にコミュニケーションが図られ、情報の共有や参加者間での仲間意識が芽生えるなど、お互いを認め合う雰囲気がある。社会一般では迷惑と捉えられるような障害特性もSOでは周囲の人が温かく見守っている。これらの要素は安心の担保となり、口コミなどで広がり、新たな参加者を呼び込むことや継続した参加に繋がっていると考えられる。

一方で地域との繋がりは弱く地域クラブとの交流は限定的であり、プログラムの内容も比較的同じようなものが多いため、成長度合いがわかりやすい反面、単調化してしまっている。スペシャルオリンピックス本部のホームページは見やすいものとなっているが、今後参加者を増やしていく為には各地域単位におけるホームページの開設及び改良、大会の様子だけでなく練習の様子などわかりやすくする必要のあるだろう。

(2) 求められる居場所

本研究におけるインタビュー調査にて明らかになったことは、SOの参加者が「居場所」「居心地」「生きがい」を強く感じているということである。障害のある方は他人と比較されたり、いじめの標的になりやすかったりと自己肯定感を育むことが健常者と比べて難しい。Cさんの父親の「いじめにも遭ってきたが、性質は違うが誰にでも起こり得ること。障害者はそれが目立ってしまう特徴があ

る。」やAさんの父親の「いじめの標的になることも多かった。」という話からもこの傾向が散見される。

こうした現状において、私は障害のある方が自己肯定感を高めていく1つの手段としてスポーツ活動が持つ意味合いは大きいと考えている。その理由として、他者から賛辞を受けたり、自己ベストを更新したりとスポーツは喜びを体感し分かち合うことができるからである。SOでは成果だけでなくチャレンジしたことを褒め、参加者は行動を褒められたことで意欲的にチャレンジするようになり、このサイクルが参加者の自己肯定感を高めていく。自信や経験は簡単に習得できるものではなく日々の積み重ねによって得られるものであり、まさしくSOにはそうした環境がある。

同時に保護者にとってもかけがえのない居場所となっている。プログラムに参加している間は、子供を安心してコーチやボランティアに預け、同じような悩みを抱えている者同士で子育ての悩みや不満を相談することができる。親離れ・子離れが難しい家庭においてはよいトレーニングにもなり、リフレッシュに繋がっているのではないだろうか。

私は一人ひとりの個性として得意なこと苦手なことがあり、沢山の時間を要しても自分らしさを表現することが大切なことだと考えている。そのような居場所がまさしくSOにはあり、このような居場所を増やしていくことがノーマライゼーション社会の実現に向けての一歩となると信じている。本研究ではSOに注目しているが、書道や美術などの芸術活動、料理や清掃など自分の力を発揮できる居場所が必要であり、上記した点が整えばSOでなくともやりがいや生きがいを感じることができるのではないかと考えている。

最後に本研究において明らかとなったSOの参加にいたる要因構造について、**図1**に示したので参考にしていただきたい。

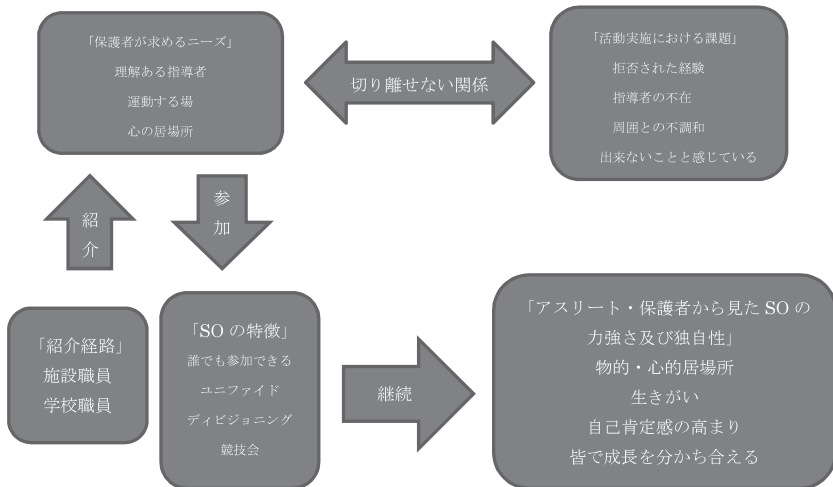
6 今後の課題

初めに今回のインタビュー調査にて得られた知見は有意的に抽出された5人の家族を対象とした限定的なものであり、あくまでも一つの仮説を提示しているに過ぎない。SOの他の種目や他の都道府県など地域性による差異、家族関係が良好ではないとみられる対象や障害に対する理解がうまく形成されていない家族については検討することができていない。

次に本稿における調査や考察は当事者目線が強く、スポーツを提供している主催者側の状況についてインタビュー調査等を行っていないため推測の域を出ていない。今後なぜ今までそういった指導者が育たなかったのか、指導をできないと判断したのか等の要因についても検討する必要がある。これらを把握することは新たな居場所づくりに寄与する重要な課題であり、いずれも今後の研究課題とし

たい。

図1 SO参加に至る要因構造



参考文献

- 1 地域における障害者スポーツ普及促進に関する有識者会議 (2015)
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/sports/detail/_icsFiles/afieldfile/2015/09/07/1354044_03.pdf 最終閲覧日20161028
- 2 文部科学省 (2013) 健常者と障害者のスポーツ・レクリエーション活動推進事業報告書最終閲覧日20161028
http://www.ssf.or.jp/Portals/0/resources/research/report/pdf/contract2013_2-1.pdf
- 3 土田優子 (2011) 「LD傾向生徒の自己肯定感を高める支援の在り方：P D C Aサイクルの評価を活用して」『教育実践研究』257 - 262 2011-03
- 4 南条正人・金子勝司 (2007) 「知的障害児 (者) のスポーツ・レクリエーション活動と生活の質 (QOL) に関する研究」『共栄学園短期大学研究紀要』
- 5 奥田睦子 (2012) 「統合型地域スポーツクラブへの障害者受け入れのためのクラブマネジメントー専門的指導者の配置と財源の両立ー」『金沢大学経済論集』第33巻第1号2012, 12
- 6 スペシャルオリムピックス (2016)
<http://www.son.or.jp/> 最終閲覧日 20161028
- 7 桑田良子 渡邊章 (2016) 「中学校・高等学校における発達障害児に対する社会性発達支援プログラムと指導法の開発 — キャリア教育と関連して —」『植草学園大学研究紀要』第8巻15 ~ 25頁
- 8 真謝孝 平田永哲 (2000) 「知的障害養護学校卒業生の就労状況と課題に関する一考察—雇用企業調査を通して」『琉球大学教育学部障害児教育実践センター紀要』No2, 139 - 148, 2000.
- 9 安井友康、千賀愛、山本理人 (2012) 「ドイツにおける発達障害者の就労移行支援とスポーツ授業」『北海道教育大学紀要』教育科学編 63(1), 125 -140, 2012 - 08
- 10 伊藤亜紗 (2015) 『目の見えない人は世界をどう見ているのか』光文社
- 11 渡邊充佳 (2016) 「自閉症児の就学をめぐる母親の葛藤の構造」『社会福祉学』第57巻第2号 57 - 67

*12 小森亜紀子 (2014) 『スペシャルオリンピックスがソーシャルインクルージョンに果たす役割—学校連携プログラムにおける交流経験を中心に—』 風間書房

最後に

本論文は卒業論文を加筆修正したものであり、文字数の都合上図など削除し寄稿した。なおスペシャルオリンピックスについては、遠藤雅子『スペシャルオリンピックス』（集英社新書2004年）を参考にさせていただきたい。